

神奈川からがんをなくす会(ACクラブ)

総 括

検診年齢が明らかに右肩上りになってきている。70歳以上が112名で37%を占める。ついで60歳代で106名の35%。全体の70%以上が60歳以上である。以前の年報でも述べたが入会当初30歳～40歳代であった会員が約6%と少数ではあるがこの30年間継続し居るのはこの会の面目たるものがあるにしても、その後の入会者も継続検診を実践していることを示している。検診の組合せでは消化器、肺および乳房を含む婦人科検診が最も多く、54%を示める。胃がん1例は胃X線消化器検査185例のうちから、大腸がんは便潜血230例から0。肺がんは300例のCTを含む胸部X線検査で0。喀痰細胞診は254件中E判定は0。乳がん例も検診95例中0。子宮がん検診は婦人科検診として乳がんと同時に受けることが全例で90例。そのうち体がんが1例発見されている。付加検診は本来のがん検診に付随する形のドック的意味を持ったもので肝機能、脂質の有所見が50%前後にみられることから本検診はこれを契機に更なる検診へと導くのを本来の目的としている。

消化器がん検診

平成19年度に消化器がん検診を受診したのは260名(男138名、女122名)であった。このうち胃がん検診としてX線検査または内視鏡検査を受診したのは185名(男101名、女84名)で139名(75%)は異常なしで、胃がん1例(0.54%)が発見された。

腹部超音波検査を受けたのは230名(男124名、女106名)で、肝臓・胆のう・膵臓・腎臓のがんは発見されなかった。

大腸がん検診として、免疫学的便潜血検査をうけたのは230名(男124名、女106名)で、このうち8名(3.4%:男6名、女2名)が便潜血陽性で、二次精密検査の大腸内視鏡検査を医療機関で受けるよう受診勧奨をした。

肺がん検診

本年度のACC検診総数301件に対して単独臓器への検診は少ない。すなわち消化器(胃・大腸)についての9例に対して肺については31例と増加している。検診分野では肺がん検診は大きいブランド名を得ているものと思われるが、やはり肺がんのみを特定して検診する施設を探し出すとなると案外に二の足を踏むのではないか。従ってこの31名も肺がん以外の他の臓器の検診・健診については他の医療機関

を受診していることが多い。受診者数300名のうち要精検者は5名で1.5%であるが有所見件数は560件で、その他の項の325件は胸部X線写真上は所見があるものの肺所見としては直接には無関係であり、235件は表8に示すごとくである。肺がん例はなかった。このうち要精検例は5例にみられ2名は治療可能の医療機関に紹介している。

乳がん検診

乳がん検診は17年度より担当者が代わり検査方法も現在の標準的な50歳以上隔年MMG1方向の視触診併用検診、40歳以上隔年MMG2方向の視触診併用検診に準じ、50歳以上にもMMG2方向さらに隔年検診の間にUS視触診併用検診をニッチに挟むより精度が高い検診方法に変換して来つつある。また今後増加が予想される30歳代にはUS視触診併用検診を積極的採用、40歳代でもMMGの高濃度型で読影困難の方にはUSの比率を多くすることも考慮し、オーダーメイドな検診を行うように努め、MMG偏重な検診からの脱却を図っているが、長い加入者は、まだ戸惑いがあるようだが、よく説明し納得してもらっている。100名程度の殆どクローズド・サークルの中からは発見乳がんは出にくくまだ無い。

子宮がん検診

ACクラブ女性会員で平成19年度受診された135名(前年度153名)中、子宮頸がん検診受診者は90名(66.7%)、続いて体がん検診も受けられた方は78名(57.8%)であった。

頸部細胞診で要再検、要精検と判定された方は無かったが、内膜細胞診の結果、要精検と判定された方が1名あり湘南鎌倉病院で手術を受けられた。病院からのご報告によると類内膜腺癌I期の早期癌で現在全く障害なく経過順調とのことである。

昨年度に引き続き本年度もACクラブ会員受診者の中から早期体癌が発見された実績を特に強調しておきたい。厚労省の体がん検査指針で「不正性器出血を訴えたことのあるもの」という条件はそもそも検診のクライテリアになじまず、精密検査、治療の対象であるから「不正出血即産婦人科受診」の必要性を啓発すべき、という考え方が現在支配的になりつつあるが、医療の現場では仲々理屈通りにはいかないことの証でもある。従って現在のACクラブの検診方式は継承されるべきと考えている。

関係の集計表は100頁に掲載